

令和8年度第5回 感染症発生動向調査協議会

議事概要

1 日 時 令和8年8月19日（水） 14：00～

2 場 所 岐阜大学医学部本館 1階 入札室（岐阜市柳戸1-1）

3 出席者

委 員：馬場 尚志（岐阜大学医学部附属病院 感染制御室 室長）

澤田 明（岐阜大学医学部附属病院 眼科 臨床准教授）

川本 典生（岐阜大学大学院医学系研究科 小児科学 臨床教授）

加藤 達雄（国立病院機構長良医療センター 院長）

高橋 義人（岐阜県総合医療センター 中央検査部部長 兼 臨床検査科部長）

オブザーバー：市原 拓（岐阜市保健所 感染症・医務薬務課 感染症1係長）

事務局：宮川 紀子（感染症対策推進課 感染症対策係長）

松岡 真史（感染症対策推進課 技術主査）

青木 美樹（感染症対策推進課 主任技師）

酢谷 奈津（保健環境研究所 疫学情報部長）

野池 真奈美（保健環境研究所 主任専門研究員）

4 議 題 （進行：加藤委員、STI：高橋委員）

（1）前月の感染症発生動向について

（2）検討すべき課題

（3）情報提供

5 議事概要

（1）前月の感染症発生動向について

- ・事務局から7月分の感染症発生動向調査結果について、集計表及び統計グラフ資料に基づいて説明を行った。
- ・月番委員から月番委員作成資料に基づいて発生動向に対するコメントがあった。

（2）検討すべき課題

●重症熱性血小板減少症（SFTS）の発生状況

- ・事務局から、国立健康危機管理研究機構が公表している資料等に基づき、全国のSFTS発生状況について説明した。また、これまでに岐阜県内で報告された3例について情報共有した。

【意見交換】

（委 員）岐阜県の事例で、報告された保健所と推定感染地は異なっているという認識でよかったでしょうか。

（事務局）患者を診断した医療機関を所管する保健所への届出となりますので、推定感染地とは異なることがあります。

(事務局) 内科学会の地方会の一般演題はほとんど症例報告ですが、三重県や静岡県の施設を中心に一定の割合が SFTS の報告であり、それだけ注目されているということだと思います。

三重県などでは、県内全体というより特定の地域に集中している、いわゆるホットスポットがあるようですが、岐阜県の場合でも特定のごく狭い地域というわけではないものの、現時点では東濃圏域だけで発生しているようです。

(委員) SFTS が気候的に南方に多いということなのか、推定感染地に北海道が入っていますので、農業従事者が多いということも影響しているのでしょうか。

(委員) 感染地域が西から東に向けて広がってきましたが、北海道から報告された原因は、はっきりしない部分もあります。岐阜県では、昨年初めての患者報告がありましたが、それ以前に、県の調査でも野生動物から SFTS 抗体が検出されていて、病原体が浸潤してきている状況が確認されていました。野生動物が人の居住地区に近いところに出てくる状況などが感染の機会の増加につながっている可能性もあるかも知れません。まだ患者報告のない県でも同様の状況かもしれません。

(委員) 獣医療域ではよく知られていることのようにですが、猫は SFTS に感染すると発症して重症化するようです。発症した猫を診療した動物病院のスタッフが感染した事例がいくつか報告されています。一方で、他の動物では重症化しない動物もいて、そういう動物が病原体を運んでいるのかもしれない。SFTS 患者に接した医療関係者が感染した事例もあるので、十分注意する必要があります。

ダニ媒介性感染症については、動物由来感染症に関する会議でも議論されていますが、獣医師や保護猫活動をされている人など幅広い方々に関係するので、「感染症かわら版」も何度か出して啓発いただいています。引き続き注意喚起が必要です。

(事務局) 日本紅斑熱に関しては、県内で 10 例目の患者報告があったことから、県内の市町村全体に注意喚起するとともに、推定感染地となっている 3 市に対しては、住民向けに回覧板などを使って注意喚起をしてもらえよう働きかけをする予定です。

(委員) 県医師会に通知を出されると思うのですが、個々のクリニックの先生方にも情報がいくようにお願いしたいと思います。

(委員) 住民にも注意喚起をして、ダニに刺されないように対策をするとか、刺された後に何か症状が出た時は、刺されたことを医療機関に申告していただくことが大切です。

(事務局) SFTS が北海道で報告された事例については、厚生労働省のホームページで公開されていますが、この SFTS の遺伝子型が日本のものではなく中国の遺伝子型だったということで、おそらく渡り鳥が病原体を保有したダニを運んだのではないかと思います。

●新型コロナウイルスの年齢階層別患者数の最近の動向

- ・事務局から、今年に入って全国の新型コロナウイルス感染症の高齢者の患者割合が減少し、14 歳以下の患者の割合が増加していること、また、岐阜県内でも 7 月の患者報告で同様の傾向が認められる点について説明を行った。

【意見交換】

(委員) 全体の患者数については昨年より減っていますが、その一部には、以前ほど検査をしなくなったということの影響があるかも知れません。

(委員) 昨年同期と比べると患者数が随分減っており、今年は大きな流行にはなっていませんが、前回の冬シーズンと比べれば同じレベルの状況と言えるように思います。一方で、九

州の一部の県では定点当たり患者報告数が 10 を超えたところもあり、同様に小児の割合が多いと言われているようです。

5 類移行後 3 年が経過し、小児、特に低年齢層はワクチン接種を受けていない方も多くなっていると思われます。小児の割合が増加していることについて、ワクチンを受けていない年齢層が影響しているのか疫学的に注目が必要だと思います。また、小児の患者が増加したとしても予後に大きな問題なく治癒すれば良いのですが、初期には、感染後の川崎病様症状など様々な問題も指摘されていたので、今もそれらが起きているのか、注意深くみていくことが必要だと思います。

(委員) 小児の入院患者は増えていなくて、川崎病様症状とか MIS-C (小児多系統炎症性症候群) にはつながっていない、少なくとも重症化の傾向はなさそうという印象です。

(委員) 肺炎球菌など他の病原体でも以前から言われているように、まず小児が感染して、家庭内で高齢者や基礎疾患を持つ方に拡がることもありうるので、そちらの啓発もいるかもしれません。

(事務局) 国の公表データで、全国のゲノム解析の結果をみると、今年の 4 月以降、流行株の遺伝子型が入れ替わってきており、現在は SS.2 という型が主流になっています。流行株の入れ替わりというのは影響しているのでしょうか。

(委員) 遺伝子変異による流行株の入れ替わりは常に起きることで、同じオミクロン系統の株の中での変異によって、宿主を変えるほど疾患特性が大きく変わることはないと考えています。インフルエンザや RS ウイルスなど他の病原体をみると、それまでの罹患歴やワクチン接種の有無による宿主側の免疫の違いが、小児と大人の感受性の違いにつながっているように思います。いずれにしても、今後のデータに注目して、特別なことが起きているのかそうでないのか見極めていく必要があります。

(3) 情報提供

●月番委員からの情報提供

- ・呼吸器感染症予防週間 9 月 24 日～9 月 30 日

●感染症対策推進課からの情報提供

- ・国通知：「夏季休暇の海外渡航者に対する感染症予防啓発について（協力依頼）」
- ・国通知「『予防接種法の一部を改正する法律』の公布について（通知）」